

美術史研究資料としての『文芸時報』

匠 秀夫 ●美術評論家・茨城県近代美術館長

『文芸時報』は、文芸界における唯一の文芸新聞として、近代文学史の研究において、その時々々の文壇状況を映し出す重要な資料的価値をもつものと思われる。が、私が日本の近代美術史の研究者として、この『文芸時報』を見ると、また別種の価値を覚える。というのは、近代美術史研究の領域でも、新聞と美術雑誌は重要な資料源ではあるにしても、それらには、画壇状況の時事的な報知の余地は少なく、またそうした「状況」については、時々々の当事者はよく知ることであっても、後代の研究者のうかがい知れぬことである。ところが、そうした「状況」のうちにこそ、当代の画家なり、画壇なりの機微をつかむ手がかりがある。『文芸時報』は、当初から、文学にとどまらず、音楽・演劇・美術の報知をしていたが、特に「美術」については、「美術版」として特集号を出すようになっていた。この時事的な「状況」のくわしい報知は、昭和期美術史の研究資料として、極めて重要な基礎的文献であると言つてよい。

興味ぶかい文芸情報

保昌正夫 ●立正大学教授

『文芸時報』は名のみを知って、その実を知らないものであった。日本近代文学館編『日本近代文学大事典』の新聞・雑誌の巻にも、その項目はない。索引にも出てこない（この『大事典』にも補充するべきところはある）。しかし、現在、近代文学館には『文芸時報』が欠けてはいるが、だいぶ揃っている。今回の復刻もこれを頼りとした部分がある。

一日、文学館に出かけて、『文芸時報』を繰ってみた。紙面はかなりいたんでいるが、新聞の作りであるから今東光の「蛮勇」記事なども出てきて、実におもしろい。とくに「時報」欄が見どころで、「文壇消息」なども普通紙には見られぬものがある。大正の終わりころの草野心平の詩なども載っていて、珍品、あまたである。

『文芸時報』については一〇年ほど前に山内祥史氏が、不揃いながら目録を編んで紹介してくれたこともあるが、今回ようやく、その全貌が現われるのはうれしく、有りがたいことである。



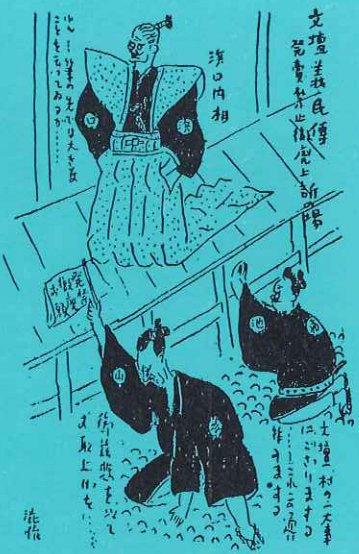
文壇七新聞

待望、画期の復刻版

森本 修 ●奈良教育大学教授

『文芸時報』は、大正末年から昭和初年にかけて刊行された「文芸界に於ける唯一の文芸新聞」であったが、『日本近代文学大事典』にも記載されておらず、この事典が刊行された同じ年に、山内祥史氏が『文芸時報』目録』を発表されたが、欠号が多く、全容を知ることができなかった。

本紙は、芥川龍之介の「拊掌談」「小説の読者」「食物として」が掲載されている他、徳田秋声、武者小路実篤、葛西善蔵、葉山嘉樹等、当時の作家のほとんどが執筆している豊富な資料源で、同時期の研究に携わる者にとっては、見落とすことのできない貴重な文献である。私は、かつて『宮地嘉六著作集』の編集に関わった際にその片鱗にふれる機会があったが、この度全号が復刻版として刊行される運びとなったことは大きな慶びである。



俵内相

大きなよろこび

青山 毅 ●書誌学者

ここ数年、戦前に刊行された芸術関係、あるいは大学の新聞などが、多く復刻されるようになった。新聞の場合、その原本の揃いをひとつの機関で閲覧するということは、こん日ではほとんど不可能となっている。それだけに、どの分野の資料であれ、ひとつの資料が復刻されると、そのつど、大きなよろこびが私達に与えられる。資料の復刻は、その分野における研究の前進のみならず、書誌学的な面からいっても、実にありがたいことである。そういうなかで、『日本学芸新聞』や『日本読書新聞』を復刻した不二出版が、今度は『文芸時報』を復刻するという。

『文芸時報』については、その後身である『芸術新聞』を、私はかつて偶然の機会で購入し、その再刊号（昭和一六年二月一三日付）以降の細目を、発表したことがある。そういうこともあって、『文芸時報』の全容を目にし、そして調べてみたいというのが、長年の夢となっていた。今、その夢が実現されるとあって、私は大きなよろこびに包まれている。



新道純文壇若手連

復刊版『文芸時報』刊行概要

概要 1925(大正14)年11月～1930(昭和5)年12月
 全3巻 第1巻(1～24号) 1925年11月～1926年11月
 第2巻(25～94号) 1927年1月～1928年12月
 第3巻(95～150号) 1929年1月～1930年12月
 B4判／上製／総1,208ページ

別冊 解題・総目次・索引 <別冊のみ分売可・本体価格2,500円>

解題 山内祥史 <神戸女学院大学教授>

推薦 青山 毅 匠 秀夫
 保昌正夫 森本 修 (五十音順)

本体価 70,000円 (分売不可)

関連図書<復刻版>ご案内

文学報国 全1巻

『文学報国』は、太平洋戦争下の1942(昭和17)年5月に国策の周知徹底と宣伝普及のため情報局の指導により発足した日本文学報国会の機関紙である。

日本文学報国会は、一部の例外を除き当時のすべての文学者が参加しており、紙面には国家統合の名のもとに軍部と密接な関係を結んだ文学者の姿勢が克明に映じだされる。一方言論の自由が死滅したに近い状況下、慎重に表現を選びながらも極限下の文学者の最後の良心も噴出している。

帝国主義戦争と文学とアジアの問題を考える重要な材料として復刻するものである。

- 全48号、昭和18年8月～昭和20年4月
- 解題(山内祥史)・解説(高橋新太郎)・総目次・索引付き
- A3判・上製・160頁
- 本体価格＝18,000円

日本学芸新聞 全3巻 別冊1・付録1

『日本学芸新聞』は、1935(昭和10)年に通信社・新聞文芸社の機関紙として創刊された。

本紙に執筆・登場する人物は多数・多様で、大宅壮一、辻潤、戸坂潤、清水幾太郎、宮本百合子ら約1,500名、その多くが戦前から戦後を通じて文壇形成に大きく寄与した主要作家・文芸評論家ばかりである。

本紙は言論統制下にあつて、文学・芸術の自由を訴えた数少ないジャーナリズムであったが、1942年8月発行の136号より、日本文学報国会の機関紙としての役割を果たし、やがてそれは『文学報国』へと引き継がれる。

- 全155号、昭和10年11月～昭和18年7月
- 別冊＝解説(香内信子・香内三郎)・総目次・索引付録＝文芸思想講演集
- B4判・上製・総1,104頁
- 本体価格＝65,000円

振替 東京 〇三(三三八一)四四三二
 FAX 〇三(三三八一)四四三二
 TEL 〇三(三三八一)四四三二
 東京都文京区向丘一丁目二番二
不二出版

本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

※弊社は注文制です。お近くの書店へご注文ください。